

キャサリン・キャンプ・メイヒュー文書の分析(1) —デューイ実験学校の最初の6カ月の授業実践に関する資料—

小柳正司
(地域文化学科)

A Search of the Katherine Camp Mayhew Papers (1): An Analysis of the Lesson Notes Written by the Pupils of the John Dewey's Laboratory School During Its First Six Months

Masashi KOYANAGI

キーワード：実験学校 ジョン・デューイ 教育課程 カリキュラム 教材開発
The Laboratory School John Dewey Course of Study Curriculum Subject Matter

1. はじめに

筆者は近著『デューイ実験学校における授業実践とカリキュラム開発』(2020年3月)において、デューイ実験学校のカリキュラム開発とそれに取り組んだ教師たちの授業実践の詳細を、1896年1月の開校から1898-99年度(1899年6月終了)までたどった¹⁾。だが、開校後の最初の6カ月間(1896年1月～6月)については、「試行錯誤の期間」とされる以外、その実態を直接うかがい知る実践報告等の資料はなく、わずかにメイヒュー=エドワーズ『デューイ・スクール：シカゴ大学実験学校 1896～1903年』(1936年)や後年のデューイ自身の一部の著述、さらにはこの期間に書かれたデューイの書簡などを手掛かりに、最初の6カ月間の経緯を間接的に知るほかはなかった²⁾。

この最初の6カ月間は、クララ・ミッチェル(Clara I. Mitchel)という女性教師がただ一人正規の教師で、これにシカゴ大学教育学科の大学院学生であったスメドレー(Frederick W. Smedley)が手工訓練(manual training)を担当するアシスタントとして加わり、その他に体育の授業をシカゴ大学女子

体育科主任のアンダーソン(K. S. Anderson)が受けもっていた³⁾。デューイは開校直前の時期に、ミッチェルに「今年度はプランの実行可能性を示すだけでよい」と指示している⁴⁾。ここで「今年度」とは1896年6月末までのことであるから、開校後の最初の6カ月間はデューイが前年に私的に印刷・配布したとされる『大学附属小学校組織案』に示された授業計画がはたしてどの程度実行可能であるのかを確かめる期間とされていたわけである。開校初日の様子を伝えた『シカゴ大学週報』の記事からは、初日にさっそく『組織案』にある「1月第2週」の1項目目「校舎と敷地を調べる、為されるべき課題の指示」、および5項目目「厚紙の箱を作る」が実行されたことが確認できる⁵⁾。まさに手探りの船出といったところであろう。そして、メイヒュー=エドワーズの『デューイ・スクール』によれば、この最初の6カ月間の経験は、大部分が「何をなすべきでないか」を示すものだったという⁶⁾。つまり、失敗から学ぶ期間だったということである。事実上ミッチェル一人が全生徒を担当するこうした手探り状態のもとでは、後に『大学広報』(University Record)⁷⁾に

定期的に掲載されていくような正規の実践記録を作成する状況にはなかったものと思われる。

ところが、最近、筆者は『デューイ・スクール』の著者が執筆にあたって用いた膨大な資料(キャサリン・キャンプ・メイヒュー文書)⁸⁾の写しを整理したところ、実験学校の最初の6カ月間の授業実践の様子をうかがい知ることができる資料をわずかながら見つけることができた。ただし、教師による実践報告や実践記録ではなく、児童が書いた授業記録である。これを見ると、デューイが『大学附属小学校組織案』の中で開校当初の2カ月間(1月第2週から2月第2週までの5週間)に予定した授業計画との対応や、1896年10月以降開始される本格的な授業実践の内容との関連が確認できる。そればかりでなく、この最初の6カ月間は単なる試行の期間とか失敗から学ぶ期間とかにすぎなかったわけではないこともわかる。後の実験学校独自の教育課程編成につながる着眼点のいくつかは既に開校当初のこの時期から試みられていたことが確認できる。以下、メイヒュー文書の中の最初の6カ月間の授業実践に関係する資料を紹介する。

2. 資料の分析

(1) 1896年1月24日付 児童が書いた授業記録⁹⁾

授業記録は、授業で取り組んだ事柄を児童自身がいめいめい記録したものである。これは読み書きのスキルを習得させるためにおこなわれている。それとともに、これは児童にとっては授業の内容を振り返り、自分なりに整理する機会にもなっている。同時に、教師にとっては児童一人一人の理解の程度を確認する方便になっている。

1月24日付の授業記録はその週の振り返りが書かれている。資料には4名の児童による記述がタイプ打ちされている。資料は教師(ミッチェル)が作成したものと思われる。4名の児童の名前は次のとおりである。

ウィルフレッド・バージェス(Wilfred Burgess)
ハーパー・グッドスピード(Harper Goodspeed)¹⁰⁾
リリアン・モース(Lillian Morse)
フレッド・デューイ(Fred Dewey)¹¹⁾

これらの児童が書いた授業記録から、この週の授業展開のおよその様子がわかる。それを整理すると次のようになる。

【工作】 箱を作る。

赤と青で塗る。[たぶん、箱に色をぬる作業]
翌日、赤と黄色で塗る。混ぜるとオレンジ色になる。

【コメの調理】

「ぼくはランドー(Landor)が調理したライスが嫌いだ。ジョセフィーヌ(Josephine)のライスは最高だ。」フレッド・デューイ
その他の児童はただ「コメを調理した」としか書いていない。

【裁縫】 タオルのへりを縫う。布巾(ふきん)を作る。

【綿の研究】 広大な綿畑の様子。綿を摘む労働者。

これらの内容を『大学附属小学校組織案』に示された最初の2カ月間の授業計画と照合すると、「工作」で箱を作る作業は「1月第2週」の項目の中に「厚紙の箱を作る」とある¹²⁾。これは開校初日から継続している活動である。この週では箱に色を塗る作業がおこなわれている。児童の一人ウィルフレッド・バージェスはこの週から授業に出てきたらしく、「ぼくはみんなが箱を作っている間、学校に来ていなかったので、箱を作らなかった」と書いている。作文としては長いセンテンスだがよく書けている。

「コメの調理」は『大学附属小学校組織案』では「1月第3週」の項目の中にあり、その後「コメの研究」が「2月第1週」まで継続することになっている¹³⁾。

「裁縫」の「タオルのへりを縫う」作業と「布巾を作る」作業については、『大学附属小学校組織案』では「1月第2週」の項目の中に「タオルと布巾」があり、「1月第3週」の項目の中で「タオルと布巾のへり縫いの継続」がある。

「綿の研究」はおそらくは上記の「裁縫」の作業に関連づけて、そこからの取り出し授業としておこなわれたものと思われる。「広大な綿畑の様子」「綿を摘む労働者」といった学習内容は、『大学附属小学校組織案』の方では「羊毛、絹、綿の栽培地域

の取り立て学習、繊維製品の製造地域、交易の中心地」に対応していると思われる¹⁴⁾。ちなみに、この取り出し授業は「裁縫」を起点にして「地理」の学習が展開していくことを予定している。

こう見てくると、1月24日付のこの授業記録に示された授業内容は『大学附属小学校組織案』に示された1月第3週の授業計画にほぼ沿う形でおこなわれていることがわかる。ただし、『大学附属小学校組織案』の1月第3週の授業計画にはこのほかにいくつかの学習項目が挙げられているが、この資料だけでは『大学附属小学校組織案』の授業計画に盛られた項目がすべて実行されたのかどうかはわからない。私見では、試みられなかった項目もあったのではないと思われる。

（2）1896年1月22日付 児童が書いた授業記録¹⁵⁾

日付は前後するが、この資料は「綿」「リンネル」「羊毛」についてこの間に児童が学んだ内容がそれぞれA4版に近い大きさの紙に1枚ずつタイプ打ちで記録されている。上記（1）の資料にある「布巾を作る」活動からの取り出し授業として、布の素材である綿の研究がおこなわれ、綿との比較でリンネルと羊毛の研究がおこなわれたことがわかる。これらの取り出し授業は『大学附属小学校組織案』の「1月第4週」の項目にある「綿および亜麻と比較した絹および羊毛の繊維」に対応するものと思われる。同時に上記（1）の資料にある「綿の研究」の授業内容を詳細に確認することができる。

資料自体はタイプ打ちされており、かなりの文章量がある。多分、児童全員で授業の内容を振り返る話し合いをおこない、教師が話し合いの内容を黒板に記録しながら、全体を一つの文章にまとめていったものと思われる。ここでは6歳から9歳（小学校第1学年から第4学年相当）までの異年齢混合の児童10数名を教師一人が担当しているので、こうしたやり方で授業の振り返りと記録作成を全員でおこなったものと思われる。その際、児童はそれぞれの能力に応じて、ある者は黒板に書かれた文字を音読するだけ、ある者は音読に加えて書き写す、ある者は自分でも文章を書き、それを読み上げる、といった作業をおこない、読み書きのスキルの訓練がおこ

なわれたものと思われる。

以下、資料（3枚）を全訳する。

〔綿の研究〕¹⁶⁾

私たちは布巾のへり縫いをしています。
 布巾は綿布でできています。
 綿布を触ったことがありますか？
 何人かの子は目を閉じて触るだけで綿布がわかります。
 布巾はほぼ出来上がりました。
 綿花は長さ3分の4ヤード〔約68cm〕で、それ以上育ちません。
 かつて、あそこの綿花は育っていました。
 綿花は広い畑で育ちました——プランテーション。
 種子は3月か4月にまきます。
 一部のものが育ち、花を咲かせます。
 花は色を変えます。最初は青で、次にピンクになり、次に白です。
 同じ畑で3色見られます。
 夏の終わりには花があったところに淡い白色の綿の房ができます。コットンボールです。
 ボールの中には種子の周りに綿の繊維がついています。
 繊維は原綿と呼ばれます。
 原綿は糸に紡ぐ前に種子を取り除かなければなりません。
 コットンボールから種子を取り除いたことがありますか？
 やれば手間がかかることがわかります。
 かつては一人の黒人が1ポンド〔約450g〕の綿から種子を取り除くのに丸一日かかっていた。
 時間がかかることはみんな知っていましたが、よい方法をだれも思いつきませんでした。そのため1日ばかりで1ポンドの綿をきれいに取り出していました。

ここでは「布巾を縫う」という構成的活動（constructive activity）ないしオキュペーションを出発点にして、綿花プランテーションに関する産業地理（industrial geography）の学習にまで進んでいる。具体的には、「布巾を縫う」作業を起点に、綿布の感触、植物としての綿花の大きさ（実物を教室に用意して観察したと思われる）、プランテーションの様子（写真か絵を提示したと思われる）、綿花の育ち方、花の色の変化、コットンボールと原綿（実物を用意したと思われる）、原綿から種子を取り出す作業の体験、過去の綿生産に係る重労働、という順序で一連の学習が系統的に展開されるようになっている。「試行錯誤の期間」とはいえ、実験学校では

当初から学習課程の系統性が意識的に追求されていた点は注目される。

リンネル

リンネル布は綿布ととてもよく似ていますが、綿布よりもなめらかで気持ちがいいです。リンネルは綿よりも水分をすばやく吸い取るので、よく女の人がリンネルと綿を見分けるために布に水滴を垂らしているのを見かけます。水滴はリンネルと綿とでそれぞれどのようになるのでしょうか？

リンネルはなめらかなので綿ほどよくチリが付きません。だからリンネルは綿より汚れが少ないです。

イギリス、フランス、オランダ、その他のヨーロッパ諸国ではリンネルは綿よりも古くから使われていました。だから、シーツや枕カバーは多くの衣類とともに、綿ではなくリンネルから作られました。どの家でも植物を育ててリンネルを取り、紡いで布を織りました。

この布は今のものよりずっと長かったです。

リンネルになる植物は亜麻と呼ばれます。亜麻は小さな青い花をつけ、小さくて平たい種子ができます。種子は湿布剤や亜麻仁油を作るために使われます。布にする繊維は、綿の繊維のように花や実の中にはなくて、茎の中にあります。

茎を刈り、束ねて家に運びます。ここで水に浸して繊維を柔らかくし、長い糸状に引き裂いて巻き上げ、最後に布に織ります。

フランスとオランダは長い間世界で一番すぐれたリンネルを生産していましたが、今ではアイルランドも市場に最高のリンネルを供給しています。

先の「綿の研究」の記録と合わせ、授業担当者のミッチェルがどのような意図のもとに授業をおこなっていたのかがよくわかる記録である。もちろんデューイやデューイ夫人などからの指示や指導もあったであろうが、彼女の教師としての力量が高かったこともわかる。

「リンネルの研究」はリンネルと綿の比較が中心になっている。特に目立つのは、子どもたちがリンネルの性質と日常生活での用途との関連を捉えてそれを説明することができている点である。物事のつながりを因果関係で捉え、なぜそうなっているのかを説明できるように指導がなされていることがわかる。そして、原料となる植物の亜麻についていくつかの事実(すなわち、花と種子の様子、種子は湿布剤や亜麻仁油になったこと、リンネルの繊維は綿の

繊維と異なり茎から取ること)を学んだうえで、昔の家々でおこなわれていた亜麻からリンネルを取って布にする過程が学ばれている。これは後の「歴史」(特に産業史)の学習につながっていくことを意図したものと思われる。

羊毛

羊毛はリンネルや絹や綿よりも長い間衣服に使われてきました。文明世界のほとんどの場所で見られます。

ですから、羊の飼育は最も重要な産業の一つです。羊の飼育はコストがほとんどかかりません。羊は他の家畜が食べない短い草で育ちます。

世界中で1年間に約27億ポンド〔約12億2500万kg〕の羊毛が必要とされ、そのうちの4分の1はオーストラリアから、8分の1は合衆国から、残りはアジアとアフリカから供給されます。合衆国では羊の半分がオハイオ州で飼育され、その他のすべての州でも羊が飼育されています。

羊は初夏に毛を刈ります。羊は最初に水槽に入れて洗います。その後、乾くまで1週間待ってから刈取り小屋につれていきます。羊を台にのせるか床にねかせ、刈取り人が胸骨あたりからお腹の方に切り込みを入れます。それから背骨に向かって片方をきれいに刈り、羊をひっくり返して、もう片方を刈ります。全体が刈りあがったらオーバーコートのように脱げます。以前1頭で羊毛が44ポンド〔20kg〕もあるものがありましたが、大部分は1頭で10ポンド〔約4.5kg〕以下です。

羊は大きなコートをはぎ取られた後、こごえないようにしてあげなければなりません。

原毛は束にまとめられて工場に送られ、そこで洗浄して油と汚れを落とし、バリを取り除きます。次に染色し、糸に紡ぎ、布に織ります。

合衆国で生産される原毛はすべて国内で使われ、大工場は東部にあります。フィラデルフィアが最大の製造地で、以下順番に、マサチューセッツ州ローウェル、ロードアイランド州ウーンソケット、ケンタッキー州ルイビル、マサチューセッツ州ホールヨーク、ニュージャージー州トレントン、ロードアイランド州ポータケット、ペンシルベニア州チェスター、メイン州レイストンとなります。

アメリカ産の毛織物は最高ですが、イギリス産とフランス産も同じくらい優れているとされています。

おそらくは牧場に行って羊毛を刈取る作業を見学してきたのであろう。刈取り作業の様子が細かく観察され、記録されている。統計数値がしばしば出てくるが、これらは教師が提供したものと思われる。

重さの単位である「ポンド」や「4分の1」「8分の1」といった分数が、年少児(6~7歳)はもとより年長児(8~9歳)にどの程度理解されていたのかは不明であるが、こうした統計数値を用いることで、授業の内容が感覚的な方向に流れないように指導が意図されていることがわかる。先の「リンネルの研究」では物事を因果関係で捉えさせる指導がおこなわれていたが、それと合わせ、実験学校では当初から理知的な性格の授業がめざされていたことが確認できる。

この「羊毛」の授業では羊毛をテーマにして「地理」の学習がおこなわれている。多分、「裁縫」の活動的作業から「地理」の学習をどうやって導き出していくかを模索するためにおこなわれた授業であろう。これに限らず、活動的作業から教科の学習を導き出していくこの種の模索は「地理」以外にも「歴史」や「理科」や「文学」に関しても頻繁に試みられたものと思われる。しかし、必ずしも十分な成果は得られなかったようである。デューイは5月になって実験学校の様子を知らせるフランク・マニー宛の手紙で「授業は相対的に言って子どもたちの本来の能力にかみ合っておらず、明らかにそれよりレベルが低い」と断じ、特に「歴史」と「理科」の教材についてはいまだに何もなされていないと書いている¹⁷⁾。少なくとも「歴史」と「理科」に関しては、活動的作業から教科の学習を導き出す適切な教材が見つかっていないということであろう。

ただし、上記の「綿」と「リンネル」と「羊毛」を扱った授業に関して言えば、授業展開の系統性と教科学習への導入という点である程度の見通しが立てられており、特に各授業の後半部はそれぞれの繊維品生産(産業)がトピックになっている点などを考慮に入れると、この授業実践に限っては、後年、1898-99年度(開校3年目)になって「家庭科」の主任教師アルシア・ハーマー(Althea Harmer)が中心になって考案された「羊毛の研究」をテーマとする総合的学習のいわば端緒になっていると見ることができよう¹⁸⁾。

(3) 1896年1月31日付 児童が書いた授業記録¹⁹⁾

これは、児童たちがこの日の「工作」の授業で糸

巻き(thread-winder)を作ったことを書いた記録である。資料では次の5名の記述がタイプ打ちされている。

ウィルフレッド・バージェス(前出)
 オズグッド・ホームズ(Osgood Holmes)
 マーガレット・ダースト(Margaret Darst)
 リリアン・モース(前出)
 ハーパー・グッドスピード(前出)

作業としては、板を長さ5インチ〔約13cm〕、幅2インチ〔約5cm〕に切り、両端に4分の3インチ〔約2cm〕の穴をあけ、両端を切って〔半円形のへこみが出来るようにして〕、やすりをかけ、サンドペーパーで磨いて完成という比較的単純な作業である。これはウィルフレッド・バージェスの記述に基づいているが、その他の児童の記録はどれも単純で粗略である。糸巻きは「裁縫」の授業で使うために自作したのであろうが、あまり興味がわかかなかったものと見える。

(4) 1896年2月3日 児童が書いた授業記録²⁰⁾

これは、この日、児童がそれぞれ自分の身体の各部分を計測して、例えば「私の足の長さは28インチ〔約71cm〕です」とか「私の身長は45インチ〔約1m14cm〕です」のように、その結果を書いたものである。書き方の練習を兼ねている。そして、身体の各部分の長さの比較をおこなって「私の肩は私の身長の4分の1と同じです」とか「私の頭は身長の7分の1です」のように分数を使った記述をおこなっている。分数の練習も兼ねていたと見える。資料にある署名は以下の4人である。

ハーパー・グッドスピード(前出)
 ポール・ハーパー(Paul Harper)
 フレッド・デューイ(前出)
 マーガレット・ダースト(前出)

(5) 1896年2月4日 児童が書いた授業記録²¹⁾

以下の3名の児童の記述がタイプ打ちされている。

ハーパー・グッドスピード(前出)
 ポール・ハーパー(前出)
 マーガレット・ダースト(前出)

これは、この日おこなったコメの調理について書いたものである。最初に1日水に浸しておいたコメ

を半カップ取り、その3倍の量の湯を注ぐ。それを10分間煮る。さらに25分間ストーブの上に置いて蒸す。マーガレット・ダーストは「コメを調理できますか。私たちは今日やりました。面白かったです。コメはおいしいです」²³⁾と、初体験のコメの調理について書いている。

コメの調理は上記(1)の資料にもあり、『大学附属小学校組織案』では「1月第3週」から「2月第1週」まで3週間継続することになっている²²⁾。ハーパー・グッドスピードの記述の中に“Japanese rice”とあるので、『組織案』の「1月第4週」の学習項目にある「コメを主食とする人々」も取り上げられたことがわかる。

(6)1896年2月17日付 児童が書いた授業記録²⁴⁾

これは「料理」の授業について児童が書いた記録である。資料には以下の6名の記述がタイプ打ちされている。

- フレッド・デューイ (前出)
- フランセス・クレーン (Frances Crane)²⁵⁾
- ポール・ハーパー (前出)
- マーガレット・ダースト (前出)
- ジョセフィン・クレーン (Josephine Crane)
- ハーパー・グッドスピード (前出)

前日、澱粉にヨウ素液を加えると青く変色することを確認し、コメ粉を試験管に入れてヨウ素液を加え、コメには澱粉が含まれていることを確認した。翌日はポテトを刻んで試験管に入れ、同じ作業をおこなっている。料理の時間が同時に理科の実験の時間になっていることがわかる。これは『大学附属小学校組織案』にある「食品の要素の研究における簡単な化学」²⁶⁾の項目に該当しているであろう。フレッド・デューイは「ぼくはヨウ素を買ってきてリンゴをテストするつもりだ」と書いている。ヨウ素デンプン反応に興味をもったことがわかる。青色を「ブルー」と書いている子と「パープル」と書いている子がいるが、教師のミッチェルはどちらでもかまわなかったようだ。大事なことは子どもたちが論理的な推論によって自分で結論を導き出すことができる点であろう。ポール・ハーパーの記述がそれを示している。「今日はポテトをテストしました。ヨ

ウ素がポテトを青くしたので、ポテトにはデンプンが含まれていることがわかります。」このように物事を因果関係において捉え、推論によって結論を導き出すように学習活動を指導している点は、後の完成された姿のデューイ実験学校の授業実践を最もよく特徴づけることになる点である。それがミッチェルの指導のもとで開校当初から試みられていたことは確認しておいてよいだろう。

(7)1896年2月11日 児童が書いた授業記録²⁷⁾

この資料には「洞窟人」(Cave Men)のタイトルがついているが、原始時代の人々の生活を扱った「歴史」の授業の一部であると思われる。資料には以下の3名の記述と、名前の記載がない記述が一つタイプ打ちされている(多分、文の途中で資料が途切れている)。

- ポール・ハーパー (前出)
- ジョセフィン・クレーン (前出)
- フランセス・クレーン (前出)

およその授業展開がわかるジョセフィン・クレーンの記述を訳出する。

洞窟人はとても強かったです。
洞窟にはとても小さな穴があります。なぜなら動物が洞窟に入ってきたからです。(穴は出入口でした。)
人々は動物に石を投げました。
彼らは鋭い石で狩りをしました。
彼らは草の実、肉、果実、木の実を食べました。
彼らは家屋をもたなかったので、大きな洞窟に住んでいました。
彼らは衣服を作る布がなかったので、動物の皮を着ました。

——ジョセフィン・クレーン

洞窟人の衣・食・住について学んだことがうかがえる。さらに、ポール・ハーパーの記述からは、みんなで教室内に洞窟の模型を作り、その中に洞窟人と武器と動物の模型を置いたことがわかる。これらは多分、粘土細工によって作ったものであろう。

この授業は、実験学校が最初の6カ月の「試行錯誤の期間」を終えて1896年10月に再開された際の最初の授業のうち、年少児対象の「原始時代の住居」を主題にした授業²⁸⁾へとつながっているものと思

われる。さらに、この授業は、1898-99年度(開校3年目)のGroup II, III(7~8歳:小学校第2学年相当)の原始時代の生活を主題にした「歴史」の授業²⁹⁾へと発展し、教材面でも方法面でも低学年段階の「歴史」の授業としてほぼ完成している。

ちなみに、『大学附属小学校組織案』には「木工」(Wood-Work)に関連した「歴史」の学習内容として、「打製石器、磨製石器、金属器の各時代を通しての人間の知識と発明の成長を議論すること」「粘土または砂または厚紙による模型;洞窟と粗末な道具などの模型を使って生活と発明の様子を表現する」がある³⁰⁾。教室内に模型の洞窟を作り、粘土細工で洞窟人と動物と武器の模型を作ってその中に配置するというこの(7)の資料に記述されている活動は『組織案』のこの学習項目を実践で試みたものと思われる。

これに限らず、ミッチェルはデューイが『組織案』で示した学習項目を比較的忠実に実践していることがわかる。もちろん、彼女はメモ風にしか記されていない多数の学習項目を手当たりしだいに実践したわけではないであろう。デューイは開校当初、毎日のように実験学校に来ていたというから、ミッチェルの実践をそのつど両者で(時にはデューイ夫人のアリスや実験学校に関心をもつシカゴ大学の同僚、大学院学生なども同席して)検討し、軌道修正を図り、ミッチェルに細かな指示を与えていたことだろう。いずれにせよ、そうした中からまさに『デューイ・スクール』の著者が言うように「成功したことと、それよりも特に失敗したことに基づいて」³¹⁾次なる教材開発とカリキュラムの編成が進められていったものと思われる。

(8) 1896年3月6日 児童が書いた授業記録³²⁾

これは、アメリカ先住民のハイヤワサ(Hiawatha)³³⁾の物語を扱った授業である。以下の3名の児童の記述がタイプ打ちされている。

フレッド・デューイ(前出)

リリアン・モース(前出)

ジョセフィン・クレーン(前出)

児童が書いた記録を見ると、この授業では物語の読み聞かせをおこなったうえで、物語の内容を

鑑賞するために、先住民の住居であるウィグワム(wigwam)の模型や先住民の人形を紙で作し、それらを砂箱の上に並べて、物語の一場面を想像するということがおこなわれている。物語の内容を記したジョセフィン・クレーンの記述を以下に訳出する。

わたしは今日ウィグワムを作り、砂の上に置いた。
わたしは紙の人を切った。その人は砂で遊んだ。彼はハイヤワサの友だちでした。ハイヤワサは虹を見ました。ノコムスは彼に月の物語を話して聞かせました。むかしむかし、勇者が彼のおばあさんに腹をたて、月に向かって彼女を投げとばしました。わたしたちはいまでも彼女の影を見ることができます。

ジョセフィンM. クレーン

フレッド・デューイの記述には、その前日に鹿の膝の中から腱を見つけたとある。前後の授業がどういう流れで展開しているのかは不明だが、『大学附属小学校組織案』の「食べ物」(Foods)に関連する「動物学」の学習内容に「食べ物にする動物の動作、それらの動作に適応した身体各部分、動物の諸器官、成長、生理学」という項目があるので³⁴⁾、ここでは先住民が獲物にしていた鹿について「動物学」のごく初歩的な授業がおこなわれたものと思われる。

(9) 1896年3月20日 児童が書いた授業記録³⁵⁾

これは上記(8)の資料にある日付から2週間後の日付になっている。内容としては先住民の狩猟生活とハイヤワサが扱われており、同じ授業が継続されていたようである。以下の6名の児童の記述がタイプ打ちされている。

ヒューイト・カレンダー(Hewitt Callender)

フロイド・ウィレット(Floyd Willett)

フランセス・クレーン(前出)

リリアン・モース(前出)

ハーパー・グッドスピード(前出)

イヴリン・デューイ(Evelyn Dewey)³⁶⁾

フランセス・クレーンは、(8)の資料にあるジョセフィン・クレーンが書いたのと同じノコムスがハイヤワサに語った物語について書いている。その他の児童の記述には、ウィグワムを作ったこと、ハイヤワサが森に行き白樺の木の皮と松脂でカヌーを

作った話、先住民が弓矢を使って鹿狩りをし、肉を焼いて食べることなどの記述が見られる。

3. おわりに

従来、デューイ実験学校の最初の6カ月間は、メイヒュー＝エドワーズの『デューイ・スクール』の説明に従って「試行錯誤の期間」と位置づけられ、成功したことよりもむしろ失敗したことに基づいて当初の計画が大幅に練りなおされた期間と理解されてきた。しかし、その試行錯誤の中身は、この期間の教師による実践記録が残されていないこともあって、ほとんど不明であった。今回、メイヒュー文書の中にあるこの期間に児童が書いた断片的な授業記録の資料により、この最初の6カ月の試行錯誤の実態をわずかながら明らかにすることができた。

第1に、実験学校の最初の教師となったクララ・ミッチェルは、デューイが実験学校開校前年に書いたとされる『大学附属小学校組織案』に示された最初の2カ月間(1月第2週～2月第3週)の授業計画をほぼ忠実に実践に移していることが確認できる。もちろん、授業計画に盛り込まれていたすべての項目を実践に移したかどうかはわからない。開校当初、デューイはほぼ毎日実験学校に来ていたというから、ミッチェルの授業に対して彼はそのつど何らかの助言や軌道修正の指示をおこない、文字通りの試行錯誤が続いていたものと思われる。そのほかデューイ夫人やこの実験学校に関心をもつシカゴ大学のデューイの同僚たち、シカゴ大学教育学科の大学院学生(大半は現職教員)なども、時には助言者として、時には補助者として、ミッチェルの実践を側面で支えていたものと思われる。

第2に、後年デューイの『学校と社会』やメイヒュー＝エドワーズの『デューイ・スクール』で紹介されているような完成された姿の実験学校の授業実践の基本的な性格は既に開校当初のこの時期のミッチェルによる実践からも確認できる。すなわち、1) 活動的な作業(後にオキュペーションと呼ばれる作業)であっても、教科学習への導入が意識され、授業展開の系統性が重視されていること、2) 活動的な作業に伴う学習が感覚的・表面的なものに流れ

ないよう、若い児童の場合であっても事実確認を怠らず、なぜそうなるのかを事物や出来事の因果関係に基づいて説明できるように教師が指導していること、3) 年少児から簡単な実験に取り組みせ、因果関係に基づく推論によって自分で結論(答え)を導き出すように指導していること。総じて、デューイ実験学校の授業実践は、これまでの通念とは裏腹に、当初から主知的な性格を強くもっていたことが確認できる。

第3に、ミッチェルが開校当初の時期に取り組んだ授業実践の中には、後年、実験学校の代表的な授業実践となるもののいわば萌芽ともいえる実践が確認できる。今回確認できたものは、1) ミッチェルによる「羊毛」を教材にした授業が、1898-99年度以降小学校第2学年相当より上のすべての年齢グループで取り込まれることになる「羊毛の研究」をテーマとした総合的学習の萌芽になっていることと、2) ミッチェルによる「木工」に関連した「歴史」の授業としておこなわれた「洞窟人」の授業が、約半年後には1896-97年度の年少児対象の「原始時代の住居」をテーマにした授業へとつながり、やがて小学校第2学年相当段階の原始時代の生活をテーマにした「歴史」の授業として完成された姿を取るようになっていたことの2つである。このほかにもミッチェルによる実践には後年の実験学校の典型的な授業実践の萌芽となったものがあるかもしれないが、いずれにせよ彼女(および彼女を側面で支援した人たち)によるさまざまな試行錯誤が実験学校のその後の授業実践にとってただ単に「何を為すべきでないか」を示す失敗例にすぎなかったわけではなく、むしろその土台になっていたことは確認しておきたい。

〔追記〕

今回、メイヒュー文書の一部資料から、実験学校の最初の教師となったクララ・ミッチェルはデューイが『大学附属小学校組織案』の中で示した最初の2カ月の授業計画に沿って授業をおこなっていたことが確認できた。ところが、メイヒュー文書の中に、メイヒュー自身が1928年におこなった回想談の記

録（多分速記録を後でタイプしたもの）³⁷⁾があり、その中でメイヒューは「ミッチェル嬢はそれまで自分がやってきたこと——読み、書き、計算など——をやるのは容易なことだと悟ったが、デューイが概略を示したプログラムの知的意味内容を理解することはできなかった」と述べている。つまり、ミッチェルはデューイが示した授業計画を表面的にしか理解できなかったというわけである。メイヒューによるこうしたミッチェル評はどのように解すべきなのだろうか。

実は、メイヒュー自身は最初の6カ月の「試行錯誤の期間」が終了した後の1896年10月に、ミッチェルに続く二番目の正規採用の教師として実験学校に着任している。つまり、メイヒューとミッチェルは一時期同僚だったわけである。「二人の間はかなりうまくいったけれども、必ずしも意見が一致していたわけではなかった」とメイヒューは回想している。そして、彼女の回想によれば、デューイは実験学校開校前、フランシス・パーカーと会食をしながら実験学校の進め方を話し合い、その結果、パーカーは自分の薫陶を受けた教師の中からミッチェルを選んでデューイの実験学校に派遣することにしたのであるが、ミッチェルは「一番できの良い教師というわけではなかった」とメイヒューは付言している。

ミッチェルは1897年の春学期（4月～6月）に実験学校を去っている³⁸⁾。在職わずか1年余りである。それに比して、メイヒューは実験学校が終焉するまでその中心的な教師の一人として奉職し続け、後には姉のアンナ・エドワーズと共著で『デューイ・スクール』の出版もおこなっている。彼女はミシガン大学の卒業生で、ミシガン大学時代から彼女に対するデューイ夫妻の信任は非常に厚かった。それを考え合わせれば、上述のメイヒューによるこうしたミッチェル評は多分にデューイ夫妻によるミッチェル評でもあったと考えられる。事実、後年（1901年）ミッチェルはパーカーのシカゴ大学附属小学校（元のクック郡師範学校附属小学校）に帰任するが、翌年のパーカーの死去によりデューイがパーカーの後継としてシカゴ大学教育学部（The University of Chicago School of

Education）の学部長（Director）に就任することになった結果、彼女は再びデューイのもとで教師を務めることになるのだが、付属小学校で教員をしていたミッチェルに対するデューイの評価は「年少児にとって良い教師とは言えない」という非常に手厳しいものだった³⁹⁾。その当時も実験学校の教師だったメイヒューは、その事実を承知していたはずである。

結局、ミッチェルはパーカーの薫陶を受けたパーカーの忠実な弟子であり、デューイに対して尊敬の念を抱いてはいても、デューイを完全に理解するところまではいかなかったということであろう。それにしても、彼女が実験学校の最初の教師（しかもただ一人の正規の教師）として、デューイが示した最初の2カ月間の授業計画を比較的忠実に実践に移していた事実は確認しておいてよいだろう。彼女の実践はその後の実験学校の授業実践の特徴、つまり年少児童の教育といえども情緒的な児童中心主義を排し、いわゆる活動中心の授業展開にあっても物事を合理的に処理する知的側面の指導を怠らないという特徴を、萌芽的な形ではあるが先取りしていたし、いくつかの点では後の実験学校の完成された授業実践のいわば萌芽とも言える実践を手探りでおこなっていたことも確認できる。その意味で、ミッチェルは実験学校が最初の一步を踏み出すうえで貴重な成果を残したと言ってよいであろう。

- 1) 小柳正司『デューイ実験学校における授業実践とカリキュラム開発』あいり出版、2020年3月。
- 2) 同上書、第3章、参照。
- 3) 同上書、1-2頁。
- 4) 同上書、85頁。
- 5) 同上書、1頁。
- 6) Katherine Camp Mayhew and Anna Camp Edwards, *The Dewey School: The Laboratory School of the University of Chicago 1896-1903*, Appleton Century Company, 1936, pp. 41-42. (小柳正司監訳『デューイ・スクール』あいり出版、2017年、24頁。)
- 7) これはシカゴ大学出版から週刊で発行されていた冊子である。

- 8) Katherine Camp Mayhew Papers, Division of Rare and Manuscript Collections, Cornell University Library.
- 9) "University Primary School, Written Record, Jan. 24, 1896," Mayhew Papers, Box 3.
- 10) ハーパー・グッドスピードはシカゴ大学の古代史・比較宗教学の教授であるジョージ・シュテファン・グッドスピード (George Stephen Goodspeed) の息子である。
- 11) フレッド・デューイはジョン・デューイの第一子である。
- 12) John Dewey, *Plan of Organization of the University Primary School (1895)*, *Early Works of John Dewey, vol.5*, p. 242.
- 13) *Ibid.* p. 242.
- 14) *Ibid.* p. 240.
- 15) "University Primary School, Chicago, Jan. 22, 1896," Mayhew Papers, Box 3.
- 16) []内は手書きされたメモ。
- 17) John Dewey to Frank A. Manny, May 26, 1896, *The Correspondence of John Dewey, vol.1, 1871-1918*, ed. by Larry Hickman, IntelLex Corporation.
- 18) ハーマーが中心となって考案された「羊毛の研究」をテーマとする総合的学習については、小柳、前掲書、206-208頁、参照。
- 19) "University Primary School, Chicago, Jan. 31, 1896, Mayhew Papers, Box3.
- 20) "University Primary School, Feb. 3, 1896," Mayhew Papers, Box 3.
- 21) "University Primary School, Feb. 4, 1896," Mayhew Papers, Box 3.
- 22) Dewey, *Plan of Organization, Early Works 5*, p. 242.
- 23) *Ibid.*, p. 242.
- 24) "University Primary School --Foods--, Feb. 17, 1896" Mayhew Papers, Box 3.
- 25) フランセス・クレーンと後出のジョセフィン・クレーンは姉妹である。父親のチャールズ・クレーン (Charles R. Crane) はシカゴで材木会社を経営する企業家であり、母親のコーネリア・クレーン (Cornelia W. S. Crane) は慈善家で、実験学校の支援者であり、また保護者会 (Parents' Association) の有力メンバーでもあった。
- 26) Dewey, *Plan of Organization, Early Works 5*, p. 237.
- 27) "University Primary School, Cave Men, Feb. 11, 1896," Mayhew Papers, Box 3.
- 28) 小柳、前掲書、118-119頁、参照。
- 29) 同上書、192-199頁、参照。
- 30) Dewey, *Plan of Organization, Early Works 5*, pp. 235, 236.
- 31) Mayhew and Edwards, *The Dewey School*, p. 42. (前掲邦訳書、24頁。)
- 32) "University Primary School, March 6, 1896," Mayhew Papers, Box 3.
- 33) ハイヤワサはアメリカ先住民の酋長で、ロングフェローの叙事詩の主人公である。
- 34) Dewey, *Plan of Organization, Early Works 5*, p. 239.
- 35) "University Primary School, March 20, 1896," Mayhew Papers, Box 3.
- 36) イヴリン・デューイはジョン・デューイの第二子である。
- 37) "Mrs. Mayhew. Notes taken at Mothers' Luncheon. Oct. 15, 1928," Mayhew Papers, Box 12, Folder 3. 以下の引用はすべてこの資料からのものである。
- 38) John Dewey, "The University Elementary School: History and Character," *University Record*, vol. 2, no. 8, May 21, 1897, *Middle Works of John Dewey, vol. 1*, p.325, 参照。
- 39) シカゴ大学教育学部長時代のデューイのミッチェル評については次を参照。小柳正司『デューイ実験学校と教師教育の展開』学術出版、2010年、pp. 238-239.

(受稿 2020年9月30日, 受理 2020年11月4日)